コードギアス　黒き騎士と紅き剣

海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
コードギアス　黒き騎士と紅き剣

【Ｎコード】
Ｎ９９６０Ｅ

【作者名】
海斗

【あらすじ】
世界に飽きた少年は、神の力を得て世界に反逆する。初作品です
更新頑張ります

プロローグ　神と少年

何も変わらない日常……そんな日々に嫌気がさしながら抜け出す勇気もない自分が大嫌いだった……

夕焼けの広がる空間、そこに浮かぶ神殿の上にいるのは神道海斗……つまり俺

「……どこだここ？」

周りを見渡してみてもやはり見覚えがない。仕方ないから状況整理しよう。

俺は誰だ？
名前は神道海斗としは１７歳で普通の日本人高校生だ。
俺は何故ここにいる？
分からない。
ここに来る前何をしてた？学校行って、家に帰って、駅に行って、死んだ。

そう、死んだ。自殺した。今の生活に不満があった訳じゃない。容姿にも才能にも家族にも友人にも恵まれていた。ただ、“飽きた”だから電車の前に飛び出した。痛みはなく、一瞬だった。

そこまで思い出して出した結論。

「ここ天国か」

いやーまさか天国に行けるとは、これも日々の行いのおかげかな。

《天国ではない》

声が聞こえた、

いや、感じた。耳ではなく意識に直接干渉されている。

立っていられないほどの頭痛がするが声を絞りだす。

「天国じゃ…ない…だと？じゃあ…地…獄…か？」

情けないことに擦れた声しか出ない。

《そもそも天国、地獄、あの世、黄泉と呼ばれる物は存在しない。

身体が死ねば残った意識は消滅するか我に吸収される》

「吸…収…！？お前…は一体…なんなんだ！！」

頭痛に逆らい叫ぶがやはり擦れた声しか出ない。

《神、悪魔、人、世界、自然、天候そしてラグナレク。この世そのものであり世界に散らばる個》

意味が分からない世界？個？何を言っている？

「じゃ…あ…ここは…どこなんだ？」

《暁の神殿、世界の狭間、Ｃの世界、名ならいくらでもある》

くそ、らちがあかない。イライラで少し頭痛が紛れた。

「俺に何のようだ？」

やっと普通の声が出せた。

《反逆者の世界で神を殺す計画を止めるのだ》

《反逆者の世界？神を殺す計画？待て、どこかで聞いた気がする。

《その計画の黒幕、Ｖ．Ｖ．、シャルル　ジ　ブリタニア、彼らは異端者、危険分子、バグ、ウィルス、なんとしても排除しなければならない》

Ｖ．Ｖ．、シャルル　ジ　ブリタニア、二人の名を聞いて確信した。

「コードギアスのか！？馬鹿言うな！あれはアニメだぞ！！」

《世界とは重なる次元、異なる世界、異なる時間、異なる道を歩む、世界は単数であり多数なのだ》

コイツわざとはぐらかした言い方してんじゃねえだろうな……

「まぁ百歩譲ってコードギアスの世界があるとしよう。だがその頼みは断《拒否権は無い》！？」

《世界を拒絶したお前は世界に対して拒否権を持たない》

「どういう意味だ…」

《お前は世界で生きる義務を放棄したよってお前に対して我は義務

を果たす必要がない》

つまり自殺したのがいけなかったのか？

「なんの話だよ、義務とか果たすとか。俺がいつ義務を受け入れた？」

《全ては始まりから決まっている。我とお前たちは世界が始まる前から義務という契約で縛られているのだ》

もうやだよコイツの話し聞くの……

「一応聞くが拒否権なくて断った場合は？」

《消えてもらう》

……コイツ本当に神？むしろ悪魔だろ……あ、最初に神、悪魔、人、自然、ｅｔｃ…て自己紹介してたんだった。

「やるよ、やりゃいいんだろ？」

ちょっと面白そうだしな。

《本当によいのか？後悔はするな

「消えるかやるかの選択肢で今さら後悔すんな？ふざけんじゃねぇぞ」お前にコードと王の力を与える。利用するといい》

まさかの無視！？

「てっ、コード！？まさか不死身になるのか俺！？」

《少し違う。死なないが、身体は老いる。

目的を達成できなかったら身体が消えても意識だけで世界を漂う》

「悪趣味だな…」

うん本当に

《ではそろそろゆけ》

「ちょっと待て、向こうで何してもいいのか？」

《目的を達するならばやり方は問わない》

「わかった」

その瞬間右手の甲に激痛が走った。目の前に数多の光景が走る。

《痛みは時間がたてば消える。……お前が選ばれた意味を考えよ》

それを最後に俺の意識は闇に沈んだ。

―これは偶然か、必然か、少年は世界に問い掛ける―

FILE1　殺す者、生かす者

神根島、そこには異質な空気が流れる遺跡がある。
普段人が訪れることの無いその場所に少年が一人たたずんでいた。
【夢……じゃないな、なんか身体が縮んでるし】
少年はしげしげと自分の身体を眺めたが、ふと右手に目を移した。
右手を空にかざすとうっすらと鳥のような紋章がうかんだ。
それが入れ墨などでは無いのは肌に溶け込むように消えたのを見ればすぐにわかった
【……気持ち悪】
少年は右手をゴシゴシ擦りながら辺りをキョロキョロと見回した
【神根島……だよな？】
【そうだよ】
【！？】
背後から聞こえた声に驚き振り替えると少年がいた。
【キミ、面白いね。ボクと同じ存在なんだ】
優しい…しかし何処か狂気をはらんだ声に思わず後退り逃げ道を探した。
【クスクス……そんなに警戒しなくてもボクは何もしないよ。ボクはV．V．少しキミと話をしたいだけだ】
【……海斗】
【？】
【名前だよ…神道海斗、俺の名前】
【海斗…だね、まさかボクとC．C．以外にコードを持つものがいるとは思わなかったよ】
【俺も他にコードを持つものがいるとは驚いたよ】
まずい……。海斗は焦っていた。
いきなりV．V．に遭遇するとは運が無い。

ここは何も知らないふりをして切り抜ける。

【海斗…ボクと来なよ。安心して暮らせる場所があるんだ。　今まで一人ぼっちだったでしょ？ボクと来ればもう一人じゃなくないよ】

そりゃお前についていけば一人ぼっちにはならないんだろう。きっと毎日ギアス教団の研究者がマンツーマンで相手してくれる。

【いや、俺は一人が性に合ってるから…】

【海斗…君に拒否権は無いんだ】

V・V・は銃を取り出すとこちらに向けた。

【何もしないって言ったよな？】

【ボクはね】

ガチャリという音に振り返ると黒いフードをかぶった怪しい人達―おそらくギアス教団―が銃を構えていた。

この屁理屈ロン毛が……いつかその毛をむしり取ってやる……

【麻酔銃だから痛くないよ】

【いい情報を有り難う！！（泣）】

その瞬間、銃がいっせいに発砲された。

【来るなあぁぁぁ！！】

思わず叫び、次に来る衝撃に備えて目をつむった。

カッ！！

その瞬間だった。

右手のコードが輝きはじめたのは。

カランカラン……

何かが地面に落ちる音が響いた。

おそるおそる目を開けると周りに数十の小型の注射器のような物が転がっていて、右手を見るとまだコードが輝いていた。

【ば、馬鹿な！！あれはギアスなのか！？】

【い、いや、コードを持つものは契約はできても自分ではギアスを使えないはず……】

【それにあのようなギアス今まで一つも確認されていない】

ギアス教団の方々がめっちゃ騒いでますがどゆこと？これ俺がやったの？でも俺ギアスなんか持ってな……

―《お前にコードと王の力を与えよう》―

あ……忘れてた……

まぁいいや！！

とりあえずチャンス！！逃げるが勝ちだ！！

【待て！！】

【いいよ、放っておこう】

【しかし、あのような者を放置しては……】

【ボクに逆らうの？】

【も、申し訳ございません！】

V・V・は海斗の去った方向を見ていた。

【クスクス……神の力か、シャルル…面白くなってきたよ】

V・V・は楽しげに笑うと海斗とは逆方向に歩きだした。

―神を殺す者と守る者、相容れない存在がたどり着くのは……―

FILE2　独裁者の想いと小さな出会い

暁の神殿、そこに一人の初老の男が立っていた。

彼の名は、シャルル　ジ　ブリタニア、神聖ブリタニア帝国第９８代皇帝であり、もう一人の神を殺す者。

彼の目の前に広がる夕焼けのような光景は神々しいほどに美しかったが、彼の表情は険しく目の前の光景に対して何ら興味を抱いていなかった。

「シャルル」

「兄さん…」

シャルルは突然後ろからかけられた声に振り返らずに答えた。

この場所に来れてシャルルと呼ぶのは３人だけだ。　その内の２人がいなくなった今、声をかけた人物は１人しかいない。

シャルルの隣に来たＶ．Ｖ．は彼に目だけ向けて話し始めた。

「最後の端末が見つかったよ」

「それはどこに？」

「日本の神根島」

日本、と聞いてシャルルの顔が少しだけ険しくなった。

それを見透かしたかのようにＶ．Ｖ．が続ける。

「神根島は完全に日本の領土だから奪い取るしかないだろうね。」

シャルルの顔

が更に険しくなった。
シャルルは気付いていた、兄さんは自分を試しているということに。
自分はルルーシュとナナリーを日本に逃がしたことで助けたつもりだったが甘かったようだ。
「異論はないよね？シャルル」
ここでイエスと答えれば日本への侵略は決まる。
ブリタニアによる日本への侵略、すなわちルルーシュとナナリーの死を意味する。
だが……
「シャルル？」
「はい、兄さん…」
その答えを聞くとV・V・は満足そうに薄く微笑んだ。
これでシャルルに残ったのは僕だけ……全ては計画通り。
新しい世界が始まるときシャルルの隣にいるのはマリアンヌでもナナリーでもルルーシュでもなく、この僕だ。
これで自分は父と呼ばれる資格はなくなった。ならば進もうこの道を、結果は全てに優先するのだから……
「シャルル、そういえば面白いものを見つけたよ」
「面白いもの？」
シャルルが聞き返すとV・V・はそれまでの微笑を消して冷たい表情で言った。
「“変革者”」
「！？」
シャルルは一瞬だけ驚いた表情にな

ったが、すぐにいつもの厳格な表情に戻して何か考え込み始めた。
「ラグナレクの意志ですか？」
しばらくしてシャルルはV・V・に問う。
「みたいだね。でも変革者本人が気付いてるのかはよく分からなかったよ」
「会ったのですか？」
少し驚いたようにシャルルが言った。
「うん、“神の片鱗”を持ってたからすぐに分かったよ」
「神の片鱗……我らの計画の支障となるでしょうか？」
「いや、あれだけだと不確定要素が多すぎる、ラグナレクのことだからまだ何か仕掛けがあるはずだよ」
「仕掛け、ですか……」
「まぁ、当面は今の計画通りに行こう」
そう言うとV・V・はシャルルに背を向けて歩きだした。
しかし出口のあたりでふと足を止めた。
「そういえば、名前を教えてくれたよ」
シャルルは黙って聞いている。
「確か……
…神道海斗」
「ハックショイ！！」
日本の東京都、そこで一人の少年がせいだいにくしゃみをしていた。

「風邪か？いやこの身体は風邪引かないか…」

見かけ１０歳のこの子供、実は１７歳である。

ラグナレクがこの世界に送るさい、時代にあうように変えたようだ。

今は２０１０年、物語が始まる7年前だ。どうやらラグナレクのはからいのようだ。何でこうしたのかは分からないが、海斗はこの間に準備をしろということだろうと結論づけた。

「いや待て……今はそれよりも重大な問題があるんだ……」

そう、この変てこりんな身体より重大な問題……すなわち衣食住！！

とくに“食”の部分は絶賛募集中！今もお腹がサイレンをならしている。

まぁ確かに空腹で死にはしないんだろうけど元気出ませんよ？一日の元気は朝ごはんからですよ？

「はぁ……世間は子どもに冷たいね……」

少々じじ臭いセリフだが俺にとっては切実な話なんだ。だってさ……子どもの姿→仕事させてくれない→お金ない→食べ物買えない→腹減った→活動停止……こんな感じで悪循環してますよ、はい。

「もうダメ……」

ついに道端に倒れた俺、めう立ち上がる気力もない。はは…こんなのが神様助ける救世主だなんて……きっとあそこでワンカップ片手にうなだれてるおっさんは天使だな……

あ、紅い髪の女の子が近づいてきた……

「どうしたの？」

「腹減って動けない……」

やっとそれだけ言うとまたぐてっとなる

俺……

「――――」

紅い髪の女の子が何か言ったけどよく聞こえない、少し意識が遠退いてきたよ……グハッ！？

「ガハッ！？ゲホッ、ゲホッ！！ゴホォ！？な、何だこれは！？」

口のなかに謎とスリルに満ちた味が広がったおかげで一気に意識が浮上した俺は身体を起こして勢いよく咳き込んだ。

「あ、起きた」

「“あ、起きた”じゃねぇよ！何じゃこりゃあ！？」

「何って……おにぎり？」

「今のが！？なにをどうしたらおにぎりこうなるの！？ていうか具はなんだよ！！」

「マヨネーズと納豆とプリンとヨーグルトと明太子とゼリーとチョコレート」

「何？何がどうなってそれを具に使いなおかつ混ぜようと思ったの？」

「好きな食べ物を混ぜたらもっと美味しい食べ物になるかなって思ったの」

「何？その１＋１は３にも４にもなるな発想？確かに１＋１は３にも４にもなるかもしれないけど同時に－３や－４になる可能性も秘めてるんだよ？」

あれ？女の子目がウルウルし始めたよ？

「そんなに美味しくなかった？」

いや、そんな泣きそうな目で見ないで。

罪悪感湧いてくるから……

「ま、まぁ、確かにスリルな味だったけど……俺を助けようとしてくれたんだろ？」

女の子は黙ってうなずいた。

「だったらいいじゃん。

俺はおにぎり食わせてもらって助かったしさ」

そう言って頭を軽く撫でてやったら顔を赤くして離れた。……やだったのか？でもどうやら機嫌を直したようでそのまましばらく二人で話していた（といっても元々年が離れているし別の世界から来たため話題が合わないので俺が一方的に聞かされているだけ）。

「でね、その時ね！「こんな所にいた！」お母さん！」

あれ？母親登場？

「もう、勝手に離れちゃダメって言ったのに……あら？この子は？」

そう言って母親らしき人はこっちを向いた。

「あ、初めまして神道海斗っていいます。

さっきお腹が減って動けなくなった所をその子がおにぎりくれたんです」

「あら、礼儀正しいわね。

……ん？おにぎり？」

「私が作ったの食べさせてあげたの！」

女の子が元気よく言ったが母親の顔は青ざめていた。……食ったんだな、あのおにぎり……

「その……大丈夫だった？」

「まぁ、何とか……」
母親風の人は心配してくれた。
いい人だ……ていうか心配するほどヤバイものだったのか……
「そう、よかった……。
カレン、そろそろ帰りましょ？」
……ん？
「君、そういえば名前は？」
何だか凄い名前が聞こえた気がしたので名前を聞く、ていうかこれだけ喋ったりしたのに今まで名前を聞いてなかったよ俺……
「私？紅月カレンだよ」
……マジ？カレンってあのカレンだよな？
「貴方、今日はカレンと遊んでくれてありがとう。
また、遊んであげてね？」
「はい、俺でよければ」
まさかメインキャラとこんなに早く会うとは……まぁ、仲良くなって損は無いだろうからそう答えといた。
カレンはお母さんに手を引かれて歩きだしたが途中で振り返った。
「またね！次会うときにもっと美味しいおにぎり作ってきてあげるね！」
「楽しみにしてるよ」
そう答えるとカレンは今度こそ振り返らずに歩いていった。
「マジでもう

ちょい美味しくなってくれよ……」

俺はそうぼやいたが、必要はなかった。

何故なら“次”は来なかったから。

この日、ブリタニアは日本に宣戦を布告していた。

――この世界がどうなるのか、それは神ですら分からない――

FILE3　リアル鬼ごっことヤケな少年

ブリタニアの宣戦布告から半月、ブリタニアは優勢に戦いを進めていた。

その要因はブリタニアの新兵器、ナイトメアフレーム…人型の高機動戦闘兵器である。

このナイトメアフレームの前に日本軍は次々と敗れ、唯一厳島にて“奇跡の藤堂に敗れたがそれも戦局を覆すほどの物ではなかった。

しかしブリタニアはこの圧倒的な戦況にも関わらず、帝国最強のナイトオブラウンズを投入、だがおかしなことに、戦闘には参加せず、“何か”を捜しているのである。

以上が最近日本に広まっている話だが、その“何か”は間違いなく俺だろうな…

だってこの半月を振り返ると凄いよ？

どこの変人だみたいな格好したギアス教団員とリアル鬼ごっこしてましたから。

佐藤じゃないけど逃げ延びましたから。

……しかしこの半月で人の死に慣れすぎた気がする。

ギアス教団から逃げる先で出会うのは逃げ惑う市民、焼かれる街、死体……こんなものばかりだった。

最初は死体を見ると吐きそうだった俺も最近は何も感じない……冷静に受けとめるようになってしまった。

……やめよう、こういうのは考えないほうがいい。

そう思ったとき、話し声が聞こえてきた。

【このエリアにいるはずだ！！捜せ！！】

げ……ギアス教団……しつこいなーもー……

ま、サクッと逃げますか♪

【いたぞ！！】

見つかるのはやっ！？

見つかると同時にダッシュ！！絶対逃げ切る！！

――――――――――――

【はぁ、はぁ……】

ふふふっ、逃げ切った……俺の勝利だ。

【あーばてた！！】

その場に座り込む俺、この半月で分かったことだがこの身体は身体能力も子どもまで下がるらしく、すぐにばててしまう。

【そういや…】

俺は右手の甲を見た。

あのギアス？はあれいらい一度も発動しない。

……ん？……なんか暗い？

……

不思議に思って振り返ると……出ました。

何がって？ナイトオブラウンズ。

ははっ、ギャ

ラハッドだ、ナイトオブワンだ♪　　もう一台青いのいるし、ナイトオブラウンズっぽいけど見たことないな……アニメには出てないのか？

『少年、名は？』

ビスマルクがギャラハッドの拡声器ごしに話し掛けてくる。

『……玉城です』

すまんなまだ会ったこともない玉城よ、サブキャラその1だが有り難く名前を使わせてもらう。

ズガン！！

身体の横にクレーターができました。

『私は嘘が嫌いでな。

……もう一度聞く、名は？』

【……扇です】

すまんな扇、有り難く名前を使わせてズガン！！

クレーターが増えました。

『これで最後だ、名は？』

【……神道海斗です】

すまんな玉城と扇、お前たちの名前は有効利用できなかった。

『神道海斗…確かにターゲットだビスマルク』

今まで一言も話さなかった青いナイトメアが声を発した。

……この表現だとナイトメアが喋ったみたいだな。

『……少年、我々は皇帝陛下の勅命で

お前の捕縛を命じられている。無駄な抵抗はするな』

俺はそれを聞くとジリジリと後退さった。

ドン

……ドン？

ガシッ

……ガシ？

振り返るとギアス教団。しっかり俺の腕掴んでます。

【ビスマルクよ！！我々は教主Ｖ．Ｖ．の命によりこの者の捕縛を命じられている！！手を引け！！】

グシャ

俺の腕を掴んでいたギアス教団員は次の瞬間ミンチになった。

青いナイトメアがスラッシュハーケンでやったようだ。

……怖かった……

だって数ミリしか離れていないところを自分の数倍はある巨大な丸ノコが通ったんだよ？怖いよ？ちびるよ？いやちびってないけど。

【な！？】

【き、貴様等！！Ｖ．Ｖ．様の命だといっているだろう！！】

残りのギアス教団ＢとＣがわめく。

ブン！

ギャラハッドが巨大な剣，エクスカリバーを一閃、哀れなギアス教団員ＢとＣはただの肉塊となった。

あ、Ａはさっきミンチになった奴ね。

『我々が従うのはシャルル

殿下のみ』
もう動くことのないギアス教団員達にそう言うとこちらに向き直った。
『さて、邪魔が入ったが…もう一度聞く、おとなしく捕まるか？』
V・V・って人望ないなとかどうでもいいことを考えていた俺はその質問でハッとした。
……どうする？このまま捕まるか、逃げるか……だが逃げ切る可能性は限り無く低い。
だがおとなしく捕まればもっとヤバイ状況になるのはほぼ確実……
……
【……ダッシュ！！】
俺はいきなり走りだした。
が
目の前にエクスカリバーを突き付けるギャラハッドが現れた。
さすがナイトオブワン……
『返答は？』
【……はい】
半ばヤケ気味に答える俺、もうどうにでもなれ！！
五分後、俺はブリタニア行きの船に乗せられました。
シャルル、あなたの部下は優秀だよ……（遠い目）
———次に待つのは独裁者との会合、そこにあるのは終わりか、始まりか———

ＦＩＬＥ４　拒絶の力、新たな家族

ブリタニア本国、謁見の間。

ここには余りに異質な光景が広がっていた。

「兄上から話は聞いている」

「そうですか。

それで？こんな子供に何の用で？」

そう、子ども。

かたや世界の3分の2を支配する帝国の頂点に立つ者、かたや１０歳ほどの子ども、この二者が向かい合う光景は異質な物だった。

子ども――

海斗は質問に対して何も答えないシャルルを睨んで言葉を続ける。

「なんですか？Ｖ．Ｖ．に引き渡しますか？」

シャルルはその言葉を鼻で笑うと、玉座から立ち上がって口を開いた。

「敬語でなくともよい」

「……は？」

シャルルが何を言うかと身構えていた海斗は予想外の言葉に気の抜けた声を出した。

「そう構えずともよい。

私はお前を兄上に引き渡すつもりはない」

「……へ？」

更に予想外の

言葉にポカンとなる海斗、シャルルは玉座から離れると海斗へと歩み寄った。

それを見てジリジリと後ずさる海斗、シャルルが一歩踏み出すと海斗が一歩後ずさる、何故か笑えてくる光景だった。

「えっと……まず言いたいことはいろいろあるけど目上の人には敬語を使うよう育ったので……」

それを聞くとシャルルは可笑しそうに微笑した（５０過ぎのおっさんの微笑はキモかった—海斗談）。

「目上？立場的にはお前が上であろう？」

「……は？」

内心、は？とか、へ？とかしか言ってないような気がする海斗だが、実際わからないことだらけだから仕方がない。

ちなみにこの間も海斗とシャルルの一歩進んで一歩退がるは（謁見の間の全長が異常な長さだったため）続いていた。

「やはり知らなかったか」

海斗の意味わかりませんな表情を見てシャルルがつぶやいて続ける。

「王を越えるものとは何だ？」

シャルルの問いに海斗は一瞬考えてから答えた。

「神だ」

「それが答えだ」

またまたポカンとする海斗。

シャルルはいつの間にか壁ぎわまで追い詰められていた海斗の右腕

を掴むと甲を指差した。
「お前はこれを使いギアス教団を退けたのであろう。何が起こった」
「何がって……右手が光ったと思ったら銃弾が地面に落ちてた」
「その時何を考えた？」
「……来るなって……」
ちゃっかりタメ口の海斗も自分の力がどんな物か気付き始めていた。
「そう、それがお前の力の正体、すなわち……」
「「“拒絶”」」
シャルルの声が重なった。
シャルルが振り返ると……
「兄さん……」
ミい少年…V．V．が立っていた。
V．V．はシャルルを一瞥すると言葉を発した。
「シャルル……何をコソコソしているのかと思ったら“神の片鱗”とはね」
「少し話がしたかったので」
海斗はV．V．を睨みながら疑問を発する。
「俺を捕らえるのか？」
「…神になりきれない“片鱗”をわざわざ捕らえる？ボクはそんなに暇じゃないよ」
神になりきれない？片鱗？海斗は訳がわからない言

葉に顔をしかめた。

「兄さん…この者の処置は？」

コイツ……「兄さんに引き渡すつもりはない」とか言ってたくせに見捨てやがった……

海斗がシャルルを睨み付けるとシャルルは目を逸らした。

このやろう……ん？シャルルってこんなキャラだっけ？

そんなことを考えている海斗をV．V．は一瞥した。

「……シャルルの好きにしていいよ」

シャルルが頷くのを見るとV．V．は背を向けて去ろうとした。

「待て！！」

が海斗が呼び止める。

「何で俺を見逃す？」

「言ったでしょ？神になりきれない“片鱗”に興味はないって」

V．V．は足だけ止めて答える。

「何なんだ！？その“片鱗”って！！」

V．V．は今度は顔を振り向かせた。

目にはどこかバカにしたような光を宿していた。

「“拒絶”することしかできないなら“神”にはなれないってことだよ」

また背を向けて歩きだした。

「V．V．！！」

海斗が叫んだが今度は振り向きも足を止めもせず去っていた。

……決めた。

あの屁理屈ロン毛は絶対殺す。

海斗は去っていくＶ．Ｖ．の背中を睨みながら決意した。

「……お前の処置だが……」

「アァ！？」

海斗は１０歳とは思えない口調と目付きでシャルルを睨む。

「…リグラスに一任する」

シャルルにはなんら効果は無かったようで普通に続けた。

「リグラス？」

海斗が疑問符を発するとシャルルは扉に向けて言った。

「入れ」

入ってきたのは銀髪の男、軍人らしくがっちりとした体付きで整った顔立ち、見た感じ２０代前半くらいだろうか？

「お呼びですか？」

シャルルの前にひざまずくリグラス、その動作からシャルルへの厚い忠誠がうかがえた。

「うむ、この子どもを育てよ」

シャルルはさらっと言い切った。

「……は？」

リ

グラスの目が点になる。
それは海斗も同じだった。
「この者が成人になるまで無事育てよ、リグラス郷」
「陛下……何故わたくしなのですか？」
「ラウンズで子どもを持っているのはお前だけだ」
リグラスは何ともいえない表情をで何か葛藤して……
諦めた……
「イエス　ユア　ハイネス」
海斗はそれをよそにある疑問を抱いていた。
「……ラウンズ？」
リグラスは立ち上がると海斗に身体を向け、口を開いた。
「ナイトオブツー、リグラス・ブリオールだ」
――そこで待っていたのは力の正体と新たな家族、少しづつ、役者は出揃う――

FILE5　2つの片鱗

カツカツカツ
タッタッタッ
ブリタニア本国の郊外に建つ一つの屋敷に足音が二つ響いていた。
「ぜぇ、ぜぇ、ぜぇ……」
足音のうちの片方は１０歳ほどの子どもで激しく息切れしていた。
「……」
もう片方は大人で、終始無言で歩いている。
「ちょっと…スピード…落としてくれ…」
先ほどから息切れしていた少年はついに立ち止まるととぎれとぎれにそう言った。
「情けないな、海斗」
男は立ち止まると少年――海斗を小馬鹿にした目で見た。
それを睨みながら海斗は言葉を絞りだす。
「リグラス…お前が一歩歩くたびに三歩は走る俺の身になりやがれ」
そう、この二人では圧倒的な歩幅の差があり、むしろ一時間近くついていった海斗は１０歳（本当は１７）としてはかなり頑張っている。
「文句が多いな…案内しないぞ？」
「てめえが案内するって言いだしたんだろうが」
そう、ことの発端は一時間前にさかのぼる。

―――――　　―――　　―――――

リグラスと海斗は謁見の間を出た後、凄く重い空気に包まれていた。
片やシャルルの「育てよ」の一声で子どもを育てるはめになったリグラス。
片やＶ・Ｖ・に意味不明な言葉を大量に残されこれからの未来に多大な不安を抱える海斗。
この二人の間には会話はなく、しばらく立ち尽くしていた。
「取り敢えず……家にいこう」
海斗より若干立ち直りの早かったリグラスがそう言い、二人はふらふらと歩きだした。
屋敷にたどり着くと海斗は呆然とした。
「デカ……」
とにかくデカイ、無駄といえるほどにデカイ。
「じゃあ案内するから離れるな」
リグラスはそう言うと歩きだした。
取り敢えず海斗はそれについていったが足を止めるたびに「この屋敷俺以外は迷って出れた奴いないから」とか脅された。
これが一時間前の話。
「ナイトオブツーの俺がじきじきに案内してやってるんだ、感謝しろ」
「アリガトウゴザイマス」

リグラスは苦笑すると一つの扉の前に立ち止まった。
「この部屋は？」
「お前と息子の部屋」
……ん？？
……ん？？息子？？？
「息子って？誰の？」
「俺のに決まっているだろう」
リグラスはそう言って扉を開けると……吹き飛んだ。
パチパチパチ
しっかり仰角４５度の曲線を描いて頭から窓に突っ込んだリグラスに俺は熱い拍手を送ってあげた。
「部屋に入るときはノックしろって言ってるだろーが」
出てきた子どもはこの姿の俺とあまり変わらない年（つまり１０歳くらい）だった。
「……１０？」
ある違和感が浮かぶ。何だ？大事そうでいてどうでもよさそうなこの違和感の正体は？
そこでハッとした。
「リグラス…お前何歳？」
そう、こいつはどうみても２０代前半…もしそうならこいつは１４、５歳で子持ちになったこととなる。
リグラスは窓に突っ込んだ態勢のまま人間の限界をこえて腕をまげて指を三本立てた。
……え？３歳？
リグラスは違うと言うように指を立てたまま左右に振

ると両手の指を全て立て、３に戻した。

……３３！！？？

「嘘つくな、年齢詐称は法律で禁止させられています」

「いやマジだよ」

リグラスの息子？が保証してくれました。

マジかよ……若造りにもほどがあるだろ……

「で、お前いったい誰？」

なんかどうでもよさそうに聞いてきたのでイラっとした。

「いやそんな事よりお父さんに言うことあるだろ？」

やっと窓から抜け出した（若干ガラスがささったままだ）リグラスが子供に言う。

「言うこと？……

……

……

……ああ、ただいま」

３分ほど考えたあと子どもはそう言った。

「いや、お帰りなさいだろ？てゆーかそうじゃなくて謝れって言ってるんだけど？」

リグラスが可哀想に見えてきた。

「で、こいつは？」

俺を指差して言う

「今日からこの家に住む」

なんかむかついたのでさらっと凄いことを言った。

「そうか、名前は？」

ちょっと何この子？普通あんなこと言ったらポカンとするか怒鳴るかでしょ？　「そうか」で済ませて名前まで聞くこのゆとりは何なの？

「神道海斗だ」

そう言うとよろしくと言って手を差し出してきた。

……今どき握手？古くさい奴……

そう思いながら手を繋ぐと頭に鋭い頭痛が走った。

『よろしくな…“片鱗”』

頭に直接響く声…一度だけ体験したことがある。

そう、確かこれは……

『ラグナレクだろ？』

そうだ。

だが違うのは声を発しているのはコイツだということ。

『コイツじゃないヴァリルだ』

俺の心が読めるのか？

『まぁ、な』

俺は目の前で不適に笑う少年を見た。

何を考えているのかよくわからない。

「おい、どうした？」

ずっと握手している俺たちを不審に思ったのかリグラスが訝しげに聞いてきた。

「いや、何でもない」

手を離すと頭痛もしなくなり、声も聞こえなくなった。

「そうか？じゃあヴァリル、海斗の世話を頼む。」

そう言って逃げるようにリグラスは去っていった。

……職務怠慢だろ。

「じゃあ邪魔者もいなくなったし…話そうか？」

「……お前はいったい」

ヴァリルはニヤリと笑って答えた。

「“同じ”だよ、お前と」

———出会ったのはもう一つの“片鱗”、物語は動きだす———

FILE6　サンキューボブサップ（前書き）

すいません、急ぎで書いたためメチャクチャな内容です。

FILE6　サンキューボブサップ

〔同じ…だと？〕

目の前で不適に笑う少年――ヴァリル、語った言葉は…“同じ”

〔…お前はラグナレクの送った“変革者”だろう？〕

〔変質者？〕

〔バカかお前〕

ねぇひどくない？仮にも初対面の俺に対してひどくない？

〔ラグナレクから聞いてない？〕

〔？〕

〔変質…変革者について〕

……今さ変質者って言い掛けたよね？

まぁ、それは置いといて…変革者？聞いてないな……多分。

〔いや〕

〔やっぱりな…〕

おーい、ため息ついて面倒くさそうな顔しないでー、教えてくださーい。

〔簡単に言えば“流れ”を変えるものだ〕

〔流れ？〕

ヴァリルは楽しそうに笑って口を開く。

〔物語だよ〕

物語……コードギアスのことか？まぁ変革者自体は理解できたが新たな疑問が浮

かぶ。

〔お前……何者だ？〕

そう、コイツがこの世界の住民なら物語、コードギアスのことなんて知りえないはず。

〔最初に言っただろ？“同じ”だって〕

〔誰と？〕

ビキッ

〔すいません冗談です手をどけてください〕

〔分かればいい〕

そう言ってどけられた手の先には……陥没した壁……

〔ちょっと丈夫にされただけさ〕

壁を呆然と眺めていた俺にヴァリルは肩をすくめて答えた。

〔ちょっと？ボブサップを三秒で捻り潰せそうな筋力のくせに？〕

〔三秒は無理だ。せめて五秒くれ〕

〔まだ早いわ。ていうかボブサップ知ってんの？〕

〔昔テレビで見た〕

〔そうか、それだけ聞けば十分だ。で、こっちに来たのはいつ？〕

〔十年前〕

ヴァリルはことも無げに言った。

コイツもあいつ（ラグナレク）の被害者か……気付いたのがボブサップの

おかげなのはアホらしいがとりあえず有り難うボブサップ。

〔まぁこっちに来る時にラグナレクからお前を送るって聞いてたからいいけど〕

……ん？

〔待て待て待て待て〕

変な言葉が聞こえたんだけど？

〔？どうした〕

〔聞いてたって…何を？〕

〔だからお前が来ること〕

……ふーん。そうかそうか……俺が自殺しようとしまいと送る気満々だったのかアイツ（ラグナレク）…うん、殺す。

〔おいどこに行く？〕

〔大丈夫、ちょっと神殺してくるだけだから〕

〔え？ちょ、どうしたのいきなり？落ち着けよ〕

〔いや落ち着いてるよ。大丈夫、ちょっとだけだから〕

〔何がちょっとな訳？とりあえずお前を今自由にさせたら何かまずそうなのは分かるけど〕

五分後

〔そうか…苦労したんだな〕

〔分かる！？まったくアイツ（ラグナレク）のせいで…〕

〔いや、俺もヴァリルに拾われるまでは地獄だった…何しろこっちに来たときは赤ん坊にされてたからな…〕

〔マジ？頑張ったな〕

〔あぁ、何しろハイハイでサハラ砂漠を越えてブリタニアにたどり着いたからな〕

〔すご！？不死身でもすご！？〕

とまあこんな感じで仲良くなりました。

うん、少し楽しくなってきた。

――――見つけたのは居場所と仲間、希望とともに少年は歩みだす――――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9960e/

コードギアス　黒き騎士と紅き剣

2010年10月10日15時31分発行